

公式化以前の金正恩

——金正日総書記の後継者だと確実視された背景——

磯 崎 敦 仁

はじめに

I 従来の「後継者候補」

II 第二次後継者問題進展の兆し

III 金正恩後継説の背景

おわりに

はじめに

北朝鮮において二度目となる最高指導者の後継者問題が大きく注目されるようになったのは、二〇〇九年一月一五日に韓国の聯合ニュースが、金正日総書記の「後継者は三男・金正恩に決定」と報じたことが端緒である。同記事は、金正恩氏の誕生日とされる一月八日頃に李済剛党組織指導部第一副部長が課長級以上の幹部を召集して後継者決定を内示した、という内容であった。⁽¹⁾

後継者問題の進展は、二〇〇八年夏に悪化したとされる金正日総書記の健康問題と連動しているものと考えられた。⁽²⁾ 一指導者に権力が集中している体制において、その体制を長期的に維持していくことは、後継者問題を円滑に解決することと同義だからである。民主主義体制下の政権政党にとって次期選挙や支持率が重視されるのと同水準のことだといってよいかもしれない。そのため、最高指導者の動静に対する検証が必要とされてきた。二〇〇九年の一年間で金正日総書記の動静報道は一九九件に達しており、二〇〇五年の一二九件を大幅に上回って過去最多となった。⁽³⁾ 北朝鮮国内でも国際社会との多少のタイムラグを経て健康不安説が出回ったといわれており、それを払拭するかのように旺盛な活動ぶりであった。⁽⁴⁾ 後継者問題をスムーズに解決するためにも、現指導者の健在ぶりを誇示することは重要である。実際に、二〇〇九年下半期からは金正日総書記の指導力を強調する論調が目立ち、一月二六日には一年間の現地指導を総括する異例の解説記事が「朝鮮中央通信社報道」として報じられた。

本稿では、二〇一〇年九月二八日に開催された朝鮮労働党代表者を前後して金正恩氏が初めて北朝鮮の公式メディアにその名と姿を現すまで、後継者問題の進展状況がいかにとらえられたかを明示する。⁽⁵⁾ 筆者は金正日総書記から金正恩氏への後継者問題を検証するに際して、唯一の前例である金日成主席から金正日総書記への権力継承過程について整理したが、金正日氏が党政治局常務委員として一九八〇年の第六回党大会で公式デビューする以前の状況についての論稿は少なく、概要把握に苦労したことが執筆動機となっている。一部については、後になって脱稿段階(二〇一〇年一〇月)の見立てが誤りであったと判明することもありうるが、それは未確認の「情報」に大きく依拠することなく、北朝鮮の公式報道から現状を読み解くことの限界を示すものになり、一定の意義があるものと考ええる。

便宜的に金日成主席の後継者問題を第一次後継者問題、本稿が扱う金正日総書記の後継者問題を第二次後継者

問題とよぶことにする。

I 従来の「後継者候補」

北朝鮮における後継者問題に関する議論については、李教恵が二〇〇三年刊行の著作で丁寧に整理している。⁽⁶⁾その後、韓国では鄭成長等の研究者が積極的に論説を執筆、口頭報告をこなし、二男・金正哲後継説を「独自情報」をもとに主張し続け、それを韓国メディアが大きく取り上げ、日本メディアが転電する、という構図が見られた。

金正日体制が独裁体制であるという点に同意が得られるならば、後継者の選定や公表を含む問題の重要プロセスのほぼ全てが最高指導者の掌中にあると考えるべきである。筆者は党代表者会開催前の時点で、後継者が三男・金正恩氏であることを疑う余地はほとんどないと考えてきた。⁽⁷⁾しかし、何らかの理由で金正日総書記が全く違う決定を下せば正反対の政策転換さえ可能な体制であるため、事態は常に流動的であるともいえた。そしてそのことこそが、後継者問題を展望する上での大前提であり、最大の制約要因であった。そのため、二〇〇八年以前まで有力であった金正哲後継説についても、必ずしも誤りであったと断じることにはできない。誰が後継者なのかは、それが公表された時にこそ本来の意味を持つということである。

北朝鮮は、究極的には世襲を目指している模様であった。二〇一〇年、党代表者会開催直前の北朝鮮メディアは、「金日成朝鮮」、「金日成民族」をことさらに強調した。⁽⁸⁾第一次後継者問題の過程においては一九七〇年代から「革命の血統」を継承していくことが訴えられ、権力世襲を正当化する作業が進められてきた。金正日総書記の正統性は金日成主席の「血」を継いでいるところにも求められており、世襲以外の道を模索することは自らの

正統性を否定することにもなりかねないのである。そのため、当初から集団指導体制を目指すということは考えにくいといえた。北朝鮮の人々にとつても、長年の教育によって、世襲は当然のことだと受け止める素地がある。結果として後継者を中心とした実質的な集団指導体制になる可能性は残されているものの、それは危機管理体制と呼ぶべきものかもしれない。つまりは、「集団指導体制」なる概念の定義の問題となる。

二〇〇九年に正恩氏が後継者として有力視されるようになるまでは、金正日総書記の後継者は、長男・金正男氏（一九七二年五月一〇日生）、二男・金正哲氏（一九八〇年九月二五日生）、三男・金正恩氏（一九八三年一月八日生）の三人の息子のうちいずれかではないかといわれてきた。⁽⁹⁾ そのうち長男説、二男説が多数を占め、三男・金正恩氏は二〇〇三年頃までノーマークであったといつてよい。例えば、『朝日新聞』において初めて金正恩氏の名が出てきたのは二〇〇四年七月八日付朝刊であった。他の主要紙も同様の傾向にあり、その後も金正恩氏が有力な後継者候補であるとの論調は長らく見受けられなかった。

1 金正男氏

二〇〇八年八月中旬に金正日総書記の健康に異変があったとされた直後の九月一日付『朝日新聞』は、「韓国大統領府関係者は一〇日、今後の権力構図に関し「金委員長（総書記）でも継承まで二〇年近くかかった。今のところ息子らにそんな人物はおらず、難しいのではないか」と語った」と報じているほか、一九九七年に韓国への亡命を果たした黄長燁・元朝鮮労働党書記が同時期、「金正日総書記の後継者について「金総書記以外に実力者は見あたらないが、息子が継ぐなら、（長男の）金正男氏だろう」と述べたことも紹介している。⁽¹⁰⁾

そもそもわが国で金正男後継説が大きく注目されるようになったのは、正男氏の伯母にあたる成蕙琅氏の手記が二〇〇一年二月に刊行されたことによるところが大きい。⁽¹¹⁾ 正男氏の幼少期の写真も同書で公開された。さらに

偶然にも同年五月一日に「金正男氏とみられる男性」が成田空港から日本に不法入国しようとして入国管理局に身柄を拘束、同月四日には国外退去処分となり、北京で在中国北朝鮮大使館員に引き渡されるという事件が発生したため、金正男氏と第二次後継者問題に対する関心が高まった。その直後、わが国では金正男氏の従兄であり、幼少期の遊び相手だったという人物の著書も翻訳出版された⁽¹²⁾。しかし、当時は金正日総書記もまだ五〇代であり、三代世襲の可能性が現実味をもって論じられることは少なかった。

わが国のメディアでは金正男後継説が有力視される傾向があった。正哲氏、正恩氏に比べて正男氏に関する情報が格段に多いこと、また、朝鮮半島における長子重視の伝統に鑑みれば自然の流れであったともいえる。関西大学教授の李英和は、二〇〇九年四月の段階でも金正男後継説をとっており、その理由を「張（成沢）氏は正男氏を子どものころからかわいがった。張氏の国防委員就任は、彼が後見人となって正男氏を後継者とするための前段階。年齢的にもキャリア的にも彼が最適で、中国も望んでいる」⁽¹³⁾からだとしている。作家の萩原遼も、二〇〇九年六月時点で、「朝鮮半島は儒教社会、長男が家督を継ぐのが常識ですね。私は中国の後ろ盾もある正男氏⁽¹⁴⁾が本命だろうと思っています」と述べている。実際に、金正男氏は「最高指導者への道を歩んできた」、⁽¹⁵⁾「指導者の修業を積んで」きたとのロイヤルファミリー周辺からの証言もあった。

一方、「金正日の料理人」として知られる藤本健二は、金正日総書記に金正男氏という長男がいたこと自体を知らなかったという。北朝鮮滞在中の一三年間に一度も会ったことがなく、「金日成主席の一周忌の宴会ですら、正男の姿は見かけなかった⁽¹⁶⁾」という。そのことは、正男氏が早い時期から既に後継者レースから排除されていたことを意味するのか、もしくは金正日総書記が正男氏と異母兄弟の正哲氏、正恩氏を会わせないよう調整していたのかは不明である。ただ、金正男氏が二〇〇一年日本で拘束された際に帯同していたのは息子（とみられる男児）、妻（とみられる女性）、それに若い女性随行者だけであった。ボディガードとはつきりわかるような男性や

その他の「お付きの者」はいなかったことからして、その時点で既に後継者候補ではなかった可能性も指摘されている。さらに遡れば、一九九六年初頭に正男氏の母・成蕙琳夫人が事実上モスクワに亡命したと報じられた時点で金正日総書記の寵愛を受けていたのは正哲氏、正恩氏の母・高英姫夫人だともされており、正男氏の後継可能性は薄れていたとも考えられる。

2 金正哲氏

金正日総書記が還暦を迎えた二〇〇二年には、高英姫夫人を讃える「尊敬するオモニム（お母様）」キャンペーンが軍の一部で展開されたといわれている。同年八月には「尊敬するオモニムは敬愛する最高司令官同志に限りなく忠実な忠臣中の忠臣であられる」と題する北朝鮮の「内部文書」が出回ったとされ、わが国でも話題となったが、そのキャンペーンは二カ月間ほどで終息してしまっている。⁽¹⁷⁾当時、正恩氏が一九歳だったことに鑑みれば、年長の正哲氏に注目が集まったのは必然であった。繰り返すが、そもそも正恩氏はその存在さえほとんど外部社会に知られていなかったのである。

二〇〇二年には週刊誌『AERA』が特集を組み、「正男氏は去年五月、偽造旅券で日本に入国を図り拘束され、中国に追放されるという大失態を演じた。それで父の逆鱗に触れたのに加え、『筋目も悪すぎる』⁽¹⁸⁾」とのことで、新たな有力候補・正哲氏の出自やベルン留学について報じている。同誌はその後にも正哲有力説をとった。⁽¹⁹⁾二〇〇二年頃から二〇〇八年までは日韓メディアの多数がこの二男説をとっていたといえる。

二〇〇五年一月、韓国メディアは、正哲氏を後継者として育てるための特別組織が党内に新設されたと報じた。⁽²⁰⁾二〇〇六年一月には脱北者の話として、正哲氏の写真が党高官の事務室に掲げられ始めたとも報じられた。⁽²¹⁾二〇〇六年六月にはフランクフルト、シュトゥットガルト、ライプチヒ、ベルリンを巡回して開かれた英国出身

のミュージシャンであるエリック・クラプトンのコンサートをすべて鑑賞したとして、正哲氏（とみられる男性）の映像がフジテレビで放映された。金日成一家の家庭教師を長年務めたと主張し、韓国に亡命後、米国に移住した金賢植は、二〇〇八年発刊の著書の中で、金正男氏の母・故成蕙琳夫人が金正日氏との同居前、既に娘が一人いる人妻だったと指摘し、「出生に問題がある点が後継者としての大きな弱点になっているのは明らかだ」として、正哲後継説に注目している⁽²²⁾。

しかし、二〇〇八年夏の金正日総書記健康悪化説、さらに二〇〇九年一月に正恩後継説が急浮上してから、正哲後継説は一掃され、その名がわが国の報道に出てくることはほとんどなくなった。後述する二〇〇九年マカオにおける正男氏（とみられる男性）への民放インタビューでも正哲氏に関する質問は一切なされていない。

3 金賢氏

正男氏、正哲氏、正恩氏のいずれでもなく、金日成主席の最後の息子とされる金賢氏なる人物が後継者だとの説もあった⁽²³⁾。その存在は、金正日総書記の甥で一九八二年に韓国に亡命した李韓永（本名…李一男）氏の著書によって明らかにされていた。一九七九年二月、金正男氏の遊び相手として官邸に連れてこられたのが一九七一年生の金賢氏であり、張成沢氏の甥だとして「張賢」と名乗ったという。金日成主席と担当看護婦との間の隠し子だとの伝聞情報も紹介されている⁽²⁴⁾。この金賢氏が「後継者候補」として注目されるようになったのは、二〇〇二年夏、金賢氏が後継者の可能性が濃厚と時事通信が報じたことによるものであった。金賢氏は二〇〇一年に処刑されたとの韓国報道もある⁽²⁵⁾。

二〇〇九年六月にわが国で刊行された単行本には、次のような記述も見られる。「キム・ジョンウン（金正恩）氏を後継者にしようとの動きがあったのは事実である。だが、それが成功したかどうかは、なお疑わしい。とい

うのは、金正日総書記の妹婿のチャン・ソントク（張成沢）氏が復活し、実権を握ったからだ。チャン・ソントク氏は、キム・ジョンウン氏を後継者として支持してはいなかった⁽²⁶⁾ことが論拠とされる。そこでは、「キム・ジョンナム（金正男）氏は近しい人々に、「後継者はキム・ヒョン（金賢）だ。だから、自分は引き下がったのだ。他の兄弟を後継者にするなら、自分は納得しなかった」と語っていた⁽²⁷⁾」とされている。同書の筆者は、二〇〇九年一月発行の著書の中でも一章割いて「金正雲」は、後継者ではない！との持論を展開し、末尾で金賢後継説を繰り返している⁽²⁸⁾。

Ⅱ 第二次後継者問題進展の兆し

1 『労働新聞』の論調変化

二〇〇八年秋からの朝鮮労働党中央委員会機関紙『労働新聞』の論調の変化は注目に値するものであった。金正日総書記の動画が公開されず、その健康状態が懸念されるなか、二〇〇八年一月六日付の『労働新聞』政論（政治論評）には次のようなくだりがみられた。

千里馬製鋼連合企業所の現代化と革命偉業の継承問題！ 降仙の将来にこのような崇高な意味を込めてくださった敬愛する將軍様の鉄の意志を心に刻んで、赤い旗を高く掲げて立った新たな世代の労働階級の信念と意志の炎が降仙の空を赤く染めた。（中略）降仙の現代化のための突撃戦に赤い旗を掲げた歴史の主人公たち、彼らの平均年齢二五歳だ。平均年齢⁽²⁹⁾二五歳、どんなにか胸を高鳴らせる現実か。そうだ。革命の三世、四世が降仙の地で革命偉業継承の炎を高く掲げた。（傍線は筆者、以下同）

ここに出てくる「降仙」とは、一九五〇年代後半からの全国的な増産運動「千里馬運動」の象徴とされる降仙製鉄所（現・千里馬製鋼連合企業所）のことであり、「革命偉業の継承問題」を強調する記事で唐突に出てきた「二五歳」という表現が三男・正恩氏の年齢と一致しているため注目された。⁽³⁰⁾同製鉄所には金正日総書記が現地指導に訪れたと二〇〇八年二月二十四日付で報じられている。そこでは金正日総書記が「強盛大国の大門を開く」と宣言した二〇一二年まであと四年だ」と言及されている。二〇〇七年一月末から訴えられてきた「二〇一二年」論に関し、金正日総書記が直接言及したことが初めて確認されたばかりか、二〇〇九年元旦の重要文書「新年共同社説」やそれ以降の論調でもこの現地指導が重視されたことから、その背景には後継者の帯同があったのではないかとの観測をよんだのであった。二月二十四日は、金正日総書記の実母・金正淑氏の誕生日であると同時に、金正日氏の朝鮮人民軍最高司令官就任記念日であり、北朝鮮では特別な記念日となっている。後述する毎日新聞社入手の「内部文書」によれば、金正恩氏が「革命偉業」の「継承」を決意したのもこの日だとされる。二〇〇九年一月一二日付の『労働新聞』政論では、「今日の革命的大高潮は、一九五〇年代の千里馬進軍と一九七〇年代の『速度戦』進軍に続く先軍革命の大高潮であり、白頭山で開拓された革命偉業を人民の最高の精神力でしっかり継続する偉大な継承の大高潮」とされた。⁽³¹⁾「白頭山」とは金正日総書記の生誕地とされる聖地であり、その「革命偉業」を「継承」していくことが訴えられたのである。

この二〇〇八年秋の政論から二〇〇九年上半期にかけて、後継者の存在を示唆するような記事が数多く見受けられるようになった。たしかに金正日総書記が還暦を迎えた二〇〇二年頃から「臭う」記事が見られるようになったものの、その数が大幅に増え、表現が露骨なものになっているのは明らかであった。しかも、このようにひととき目立つ記事を執筆してきたのは宋美蘭という論説委員に限られていたが、二〇〇九年には複数の記者が書

き立てるようになったことは特徴的であった。

二〇〇九年三月一四日付の『労働新聞』政論から「太陽と星が燦然と輝くわが革命の首脳部」という表現がたびたび出てくるようになる。⁽³²⁾一九七〇年代、後継者に決まった金正日氏は「党中央」というコードネームで活動していたことを受けて、「革命の首脳部」という概念の使い方には既に注目が集まっていた。「太陽」は従来金日成主席を意味してきたが、金日成主席死後は金正日総書記を「二一世紀の太陽」と称している。そうであれば「星」は誰なのか、という議論になる。わざわざこのような言い回しを開始したことにはそれなりの意味があったのかもしれないが、下半期にはこの言い回しの頻度が激減し、定着には至らなかった。

『労働新聞』の精読を重視する北朝鮮研究者は眼を皿のようにして表現の変化を探しているように思われがちだが、北朝鮮の人々にとっては状況が異なる。彼らは毎日『労働新聞』を読む「読報」の義務が課されているからである。例えば開店前のレストランであれば、代表が『労働新聞』を音読している傍らで、他の従業員は客に出すナプキンを畳んだり何らかの手作業をしたりしながらそれに耳を傾ける、といった光景が見られる。そうすると、北朝鮮の人々は論調の微妙な変化を素直に感じとることができる。二〇〇九年、彼らにとっては明らかに後継者問題が進展しているとわかるほどに表現が露骨になったのである。

そこで想起されるのは、韓国の情報機関、国家情報院が同年六月一日、北朝鮮が在外公館に対して金正恩氏を後継者として扱うよう指示した文書の内容を国会に報告した、と日韓のメディアが報じたことである。詳細は明らかにされなかったが、一説によると在中国北朝鮮大使館では、五月二八日付の外交電文を崔鎮洙大使が同月三〇日の「生活総和(総括)」の場で館員達に伝達したという。いずれにせよ、この「文書」というものは金正恩氏イコール後継者と明記したものではなくとも、何らかの「臭う」表現で十分に北朝鮮の要員には伝わることである。

『労働新聞』の論調変化で次に注目されたのは、二〇〇九年六月二二日の連名記事であった。

強盛大国の門前に達した今日、わが軍隊と人民の精神力は、偉大な継承の歓喜で沸き立った一九七〇年代のようによりいっそう勢いよく噴出している。世代を継続して革命の首脳部に対する絶対的な信頼は変わりなく、揺るぎない純潔な思想感情にいっそう高く昇華されており、まさにここに偉大な継承で永久不滅な強盛大国の燦然たる未来がある⁽³³⁾。

二〇〇九年の状況が一九七〇年代の金日成主席から金正日氏への「偉大な継承」と並列されたのである。第一次後継者問題は、北朝鮮自身にとって唯一の権力継承の前例である。同盟国の中国が党機関紙『人民日報』の論説を通じて不快感を示し、北朝鮮国内においても反発があったといわれる社会主義体制初の世襲を強行したにもかかわらず、冷戦終焉後約二〇年経てもその体制は維持されている。すなわちそれは北朝鮮にとって唯一の成功例であったともいえ、完全には踏襲されないにせよ、参考にされていて当然であろう。

また、その間、「革命の血統」や「家門」がことさらに強調された。既に金日成主席の両親、さらには祖父母、曾祖父を称賛し、「朝鮮民族は金日成民族」というテーゼを定着させようとしてきたが、二〇〇九年二月には『労働新聞』社説で「万景台一族」が強調された⁽³⁴⁾。「万景台」とは金日成主席の出生地であり聖地として扱われている場所である。この社説で金日成主席の父・金亨稷氏が掲げたとされる「志遠」は、「代を継いで革命を最後まで行わなければならないという思想」と意味付けられた。また、北朝鮮の人々なら誰もが知る「南山の青い松」という同氏が作った歌には「万景台一族の透徹した革命観、未来観が宿っている」とされた。

そのような中で公式報道に登場したのが、金正日総書記の実妹・金慶喜党部長である。一九九四年に金日成主席が死去して以来ほとんどその動静が伝えられることはなかったが、二〇〇九年六月六日には咸州郡東峰協同農

場を現地指導した金正日総書記に同行した旨が突如伝えられた。一九九五年一〇月以来、実に一四年ぶりにその姿を現したことになる。金正日総書記と二人並んだ写真は『労働新聞』の一面にも掲載された。⁽³⁶⁾建国の父・金日成主席と「革命英雄」たる母・金正淑氏の血を引いた「万景台一族」がいかに重視されているかが視覚的に示されたのであった。その後六月七日の歌劇指導等にも随行していることが報じられているが、いずれも「党中央委員部長」の肩書で、実力者とされる夫の張成沢党部長よりも先に報じられていることが目についた。金慶喜党部長は、一二月に入ると連日のように金正日総書記の現地指導に同行したと報じられるようになり、二〇一〇年上半期には同行回数一位に躍り出た。

また、「息子の代にできなければ、孫の代に至っても」という金日成主席の有名なフレーズも繰り返された。

われわれが掲げたこの聖なる課業は、われわれの代に全てできなければ息子の代に行い、息子の代にできなければ、孫の代に至っても何としてもやり遂げなくてはなりません！（中略）密林の野営地の雪景色には雪をけちらす南山の青い松の気概が宿っている。凍えて死ぬ覚悟、殴り殺される覚悟、飢えて死ぬ覚悟によって自分ができなければ息子が行い、息子ができなければ孫がしてでも、何としてもこの地に主体の強盛大国を打ち立てなくてはならない白頭山將軍（筆者注…金正日国防委員長を指す）らの百折不屈の信念と意志が込められているということを胸中に固く受け止めて生きよう。⁽³⁷⁾

後継者の存在を暗示するような表現は以前にも見られたことはあったものの、二〇〇九年の特徴はこれまでのレベルを格段に超える論調が目に見えて増えたことにあった。

2 政治・経済の動向

上述の『労働新聞』の論調変化に比すれば状況証拠としての価値が低く、あくまでも参考程度であるが、政治体制そのものにも後継者問題の進展と整合性を持つととらえうる動きがあった。二〇〇三年頃から公式報道に「先軍思想」なる用語が多く出現し、「先軍思想によって全社会を一色化」することも提示されてきた。さらにその後「先軍思想」を唯一イデオロギーであるはずの「主体思想」と同列に並び称してきた。⁽³⁸⁾そしてついに、二〇〇九年四月九日の第一二期最高人民会議第一回会議で一年ぶりに憲法が改正され、国家活動の「指導的指針」に「先軍思想」が加えられた(第三条)。社会主義を標榜する同国にとって、イデオロギーの存在とその解釈権掌握はそれなりに重要である。金日成主席が創造した「主体思想」を宣伝扇動したのは若き金正日氏であるとされており、そうであれば「先軍思想」台頭の背後に後継者問題があってもおかしくはない。

しかし、より重要なのは、同会議において国防委員会が再編されたことである。二〇〇八年から国防委員会が「国家の中樞」と呼ばれるようになってきたことから、その格上げ、実体化の可能性は既に指摘されてきたが、それが現実のものとなった。新たに任命された国防委員の顔ぶれをみると、金正日総書記の妹婿・張成沢党部長を筆頭に、軍、警察、秘密警察の幹部が含まれていた。単純にいえば、金正日総書記が国防委員長として軍、警察、秘密警察の三者をおさえておくことが体制の維持に必要なと考えているということである。そして実体化が進む国防委員会こそが、権力の受け皿の一つとなり、委員は後継者となる人物を下支えする後見役となりうると考えられた。わざわざ憲法を改正し、人事に着手したことを公表する背景には、体制の根幹に関わる大事を動かそうとする指導部の意図が垣間見られるといえた。

二〇〇九年四月二〇日から九月一六日にかけては、「二五〇日戦闘」が展開された。五月四日付の『労働新聞』社説でその事実が明らかになったわけだが、⁽³⁹⁾これも後継者問題と関連あるものととらえられた。金正日氏が金日

成主席の後継者として内部決定された一九七四年に「七〇日戦闘」が展開され、のちにそれが若き金正日氏の実績として大々的に宣伝された経緯があるからである。これまで北朝鮮では「一〇〇日戦闘」や「二〇〇日戦闘」も展開されてきた。職場単位ごとにノルマを設定し、それに向けて増産を目指すという運動であり、一九七〇年代に金正日氏が先導したという「速度戦」を体現したものである。将来的には二〇〇九年の「一五〇日戦闘」が、若き三代目の実績として喧伝されることも考えられる。なぜならば、『労働新聞』社説に次のような記述があったからである。

戦後わが人民は偉大な首領様を心の柱として固く信じて千里馬大高潮を起こし、一九七〇年代には敬愛する將軍様を党と革命の陣頭に奉じた民族的歡喜と榮光を抱いて七〇日戦闘、一〇〇日戦闘で驚くべき奇跡を創造した。一心団結の威力をあますところなく爆発させることに今日の一五〇日戦闘の勝利の根本担保がある。⁽⁴⁾

北朝鮮では、一九七〇年代に「一〇〇日戦闘」、「七〇日戦闘」、一九八〇年代に「二〇〇日戦闘」を二回、二〇〇〇年代に入ってから「一〇〇日戦闘」が行われている。しかし、この記事では一九八〇年代以降の運動に一切触れられることはなく、金正日氏が後継者に内定し、その顔や名が公表されないまま「党中央」というコードネームで活動していた一九七〇年代の運動だけが二〇〇九年の「一五〇日戦闘」と対比されているのである。⁽⁴⁾

さらに、二〇〇九年には四月一四日（「強盛大国の火花」）と五月一日（「われらは勝利する！」）、一〇月九日（「偉大な党に従って信心高く行かん！」）の三回にわたって「祝砲夜会」が開催された。平壤中心部を流れる大同江沿いで国防委員会主催の大型花火大会が行われたわけだが、娯楽の少ない平壤市民にとって格好の話題の種であった。「祝砲夜会」という言葉自体はじめて用いられたものであり、何か新しいものを感じさせるものであ

たようである。しかも四月、五月のものについては、この行事が三代目によって指導されたものだと噂、口コミが広く出回っているともいわれるが、それらが正恩氏の「実績」として公表されるかは不明である。

実証できる段階ではないものの、いずれの動きも三代目世襲を正統化しようとする作業ととらえる。もちろん、暴力装置が機能している体制に正統性などなくても世襲は実現できるかもしれないが、正統性を形成しようとの努力は続けられてきたのではなからうか。わざわざ党代表者を招集して正恩氏が幹部に「選出」された形式をとったのもその一環である。第一次後継者問題の解決過程も単純な「世襲」ではなかった。金正日総書記が自らその指導力を父親に見せつけ、様々な「実績」を誇示して権力者の地位を掌中にするという「権力奪取」という側面も強かったのである。⁽⁴²⁾

二〇〇九年一月三〇日には北朝鮮国内で貨幣交換措置・デノミが実施された。これは北朝鮮の人々にとっては生活に密着した大きな出来事であった。新五〇〇〇ウォン札は旧券同様に金日成主席の肖像画が描かれたが、新二〇〇〇ウォン札には金正日総書記の生家が、新一〇〇〇ウォン札には金正日総書記の母・金正淑氏の生家が描かれた。これは初めてのことであった。いずれも「二〇〇八」という表記があることから前年に印刷されたものと考えられるが、いわゆる「三大將軍」の地位が紙幣のデザインにも反映されたのであり、それはすなわち金一家の血筋・家門が強調されたことにほかならない。

3 社会の動向

二〇〇九年には「白玉」第一・二部、「私が見た国」第二・三部、という二つの映画が注目された。四月公開の「白玉」(第一・二部)は、「生涯の最後の瞬間まで党と主席に無限に忠実だった抗日革命闘士呉振宇をモデルにして、革命の領導者を白玉のように純潔な気持ちでお仕えた戦士の透徹した真の思想精神世界を感銘深く示

している」とされ、「新たな世代の指揮成員達が、潰れてもその光を失わない白玉のようなきれいな忠実性を持つ」べきだという主旨で製作されたのだという。⁽⁴³⁾ 呉振宇氏は人民武力部長として長年金日成主席と金正日氏を支援した側近中の側近である。

七月に公開された「私が見た国」は、一九八八年に第一部が公開され、一九九三年に第二部の製作計画が進められたがメインキャストの死去などによって見送られたとされる作品である。再び製作の話が持ち上がったのは二〇〇九年三月に入ってからであり、「脚本は一七日間で完成し、六月初旬から二七日間で撮影を終えた」という。⁽⁴⁴⁾ 第一部はタカハシミノルという日本人記者が訪朝し、『北朝鮮探訪記』を出版するという話であったが、第二部はその娘「カヤマアイコ東京大学国際政治学教授」も父親と同様に北朝鮮を訪問後、同国を絶賛する書物を出版するというものであった。⁽⁴⁵⁾ 北朝鮮が世界を動かしている、という同じ結論を父娘が出したことに意味があるとされる。⁽⁴⁶⁾ そのため、親から子へ受け継がれるというストーリーをこの時期に映画化した理由が議論になったのであった。

また、銀河水管弦楽団の活躍も注目された。⁽⁴⁷⁾ 同楽団は二〇〇九年一月三〇日、万寿台芸術劇場で「新年慶祝音楽会」を開き、観覧した金正日総書記が高く評価したと報じられた。新たに結成された楽団が金正日総書記の前で単独公演を行ったことは、驚きに値する出来事であった。⁽⁴⁸⁾ 後述するが、金正恩氏の二七歳の誕生日となった二〇一〇年一月八日に朝鮮中央テレビで放映された「祝杯を挙げよう」もこの「銀河水」の持ち歌である。同年二月一六日の金正日総書記の六八歳の誕生日における『労働新聞』の一面トップ記事も、「銀河水」の単独公演を観覧したというものであった。⁽⁴⁹⁾ 『朝鮮新報』は、「九〇年代、普天堡電子楽団や旺載山軽音楽団が一大旋風を巻き起こしたことを引き合いに出しながら、彼らの活躍によって新たな音楽の潮流が社会に広く浸透することに期待を寄せている」とのインタビュー記事を掲載している。⁽⁵⁰⁾ 金正日氏が後継者としてその地位を確実なものとして

いく過程で、普天堡電子楽団のような新たな楽団、新たな音楽の登場は若者たちの気を大きく引き付けたとされる前例から注目された動きであった。

Ⅲ 金正恩後継説の背景

1 称揚歌謡「パルコルム」

金正恩後継説を強く後押しするものとして「パルコルム」という歌の解釈が大きな焦点となった。「足音」もしくは「足取り」などと訳されるこの歌は、二〇〇九年初頭から北朝鮮で広く歌われるようになり、子供たちのみならず軍人までもが歌っていることがわが国報道機関の撮影した映像によって確認された。⁽⁵¹⁾歌詞は以下のとおりである。

パルコルム（足音／足取り）

1 タッタッタッタ足音 わが金大将の足音

二月の精気を振りまいて 前へタッタッタ

足音足音 力強く進めば 国中の山河が喜びタッタッタ

2 タッタッタッタ足音 わが金大将の足音

二月の気概を轟かせ 前へタッタッタ

足音足音 力強く一度進めば 国中の人民が従ってタッタッタ

3 タッタッタッタ足音 わが金大将の足音

二月の偉業を受け継いで 前へタッタッタ

足音足音 より高く鳴り響いて 燦然たる未来を繰り上げてタッタッタ

ここに出てくる「金大将」なる人物が問題であった。一見すると金日成主席か金正日総書記を称賛する歌のようであるが、通常、両者がこのような呼び方で出てくることはない。しかも、「二月」というのは金正日総書記の誕生日(二月一六日)、「二月の偉業」は彼の偉業もしくは「全社会を金日成主義化」するための綱領宣布(一九七四年二月一九日)を示すものと考えられた。われわれが一月と聞くと正月元旦を想起するように、北朝鮮の人々にとって「二月」というのは「偉大な將軍様」を思い出させる特別な月なのである。その「偉業を受け継いで」いるとされたため、当然のことながら金正日総書記の後継者たる三代目を称賛する歌謡であるとして注目されたのであった。

すると今度はこの「金大将」が当の三男・金正恩氏なのか、長男・金正男氏もしくは二男・金正哲氏、はまた別の人物を指すのか、という議論になる。そこにいちおうの決着をつけたのが、「金正日の料理人」藤本健二氏の証言であった。彼は一九九二年一月八日、金正恩氏の九歳の誕生日の際に、北朝鮮を代表する李鍾吾という作曲家(普天堡電子楽団所屬)が金正日氏の側近幹部だけが集まるパーティの席で披露した歌だ、と述べたのであった。その後数年にわたって幹部仲間で歌われ、藤本氏自身もメロディをはっきりと記憶しており口ずさむことができたのだという。藤本氏は二〇〇三年の時点で既に、金正日氏が幼少の子供たちを「大将」と呼んで可愛がっていたことを明らかにしており辻褄はあう。

二〇〇九年七月二〇日にはNHK総合テレビのニュース番組もこの歌を大きく取り上げた。七月一日から四日間北朝鮮を訪れた「福岡県日朝友好協会」のメンバーが、訪問した農場の施設内の部屋に「パルコルム」の歌詞が掲げられていたものを写真撮影しており、「金大将」の部分は太字で掲示されていたことが確認されたのであった。⁽⁵²⁾「金大将」が金日成主席、金正日総書記と同じ扱いを受けているということである。さらに、北朝鮮を旅行した台湾の Hanming Huang 氏が元山で撮影したという、金正恩氏を称賛する宣伝画にも「パルコルム」の歌詞が書かれていた。

子供たちが「パルコルム」を歌いながら練り歩いている姿が確認されながらも、『労働新聞』や朝鮮中央テレビといった公式メディアにメロディが直接紹介されない等、この歌が普通の歌でないことは明らかであった。金正日総書記が「朝鮮人民軍第二六四大連合部隊芸術伝隊の公演」を観覧したことが二〇〇九年二月二三日に報じられたが、その演目にもこの歌が加えられていた。それ以来、五月二五日報道の「朝鮮人民軍三重大革命赤い旗柿の木中隊軍人の芸術小品公演」観覧をはじめとしてたびたびこの歌の題名が報じられており、「パルコルム」が重視されていることは歴然としていた。とりわけ七月には幾度となく「パルコルム」という曲名が報じられた。さらに朝鮮中央テレビは一〇月九日、金正日総書記が黃海北道に新設された芸術劇場を視察し、同道芸術団によるこけら落とし公演を観覧したと報じたが、舞台には「合唱 パルコルム」と曲目が書かれていた。また、一月七日には「パルコルム」の楽譜を描いたポスターが朝鮮中央テレビで短時間ながら放映されている。二〇一〇年に入るとさらに前進があった。二月一三日、『偉大な献身』——変化が起きた年・二〇〇九年」と題する新作の記録映画を放映する中で、音声は流れなかったものの、「パルコルム」の歌詞を見ながら合唱する農場員達の映像が流された。⁽⁵³⁾二月一四日、朝鮮中央テレビは、同日平壤で行われた小中学生による旧正月祝賀公演で「パルコルム」が演奏された場面を一部録画放映した。⁽⁵⁴⁾同公演は、金永南最高人民会議常任委員長や金英春人民

武力部長ら高級幹部が観覧したほか、平壤駐在の外交団も招待され、三月一六日にも再放映されている。

金正日総書記は『音楽芸術論』なる著書を持ち、宣伝扇動における音楽の重要性をこれまで何度も強調し、「音楽政治」を実践してきた。その時節に重視される歌は『労働新聞』の一面を全面使って楽譜と歌詞が公表されることさえある。にもかかわらずこの「パルコルム」はメロディを公表しないままであった。公式報道で正式に流されることがないという事実がこの歌の特異性を示していた。「パルコルム」という単語は、二〇〇九年末頃から全く文脈の異なる『労働新聞』記事でも目立ち始め、二〇一〇年元旦に楽譜と歌詞が掲載された「変化のあらわれるわが国」という新曲の一節にも引用されている。

2 一月八日の報道ぶり

前述の藤本氏の証言によれば、金正恩氏は、一九八三年一月八日に生まれたとされる。二六歳の誕生日となる二〇〇九年一月八日付の『労働新聞』第四面には、「祝杯を挙げよう」という歌の楽譜と歌詞が掲載された。同日朝鮮中央テレビもこの歌を初めて放送している。その時点では、韓国・聯合ニュースが金正恩後継の「スクープ」を打つ前であったためさほど注目されていなかった。しかし、翌年の二〇一〇年一月八日には、朝鮮中央テレビがこの「祝杯を挙げよう」を放映したことで注目が集まった。この歌は、二〇〇九年には二月一六日の金正日国防委員長誕生日、七月二七日の「祖国解放戦争勝利記念日（朝鮮戦争休戦日）」、一〇月一〇日の朝鮮労働党創建記念日といった特別な記念日にしか放映されていなかったという。

祝杯を挙げよう⁽⁵⁵⁾

同志よ祝杯を挙げよう 勝利の祝杯を挙げよう
われわれは一つの心、一つの意志で赤い旗を守った
祝杯 勝利の祝杯 祝杯 喜びの祝杯
偉大な人民のために祝杯を挙げよう

同志よ祝杯を挙げよう 栄光の祝杯を挙げよう
われわれは一つの心、一つの意志で祖国を守った
祝杯 勝利の祝杯 祝杯 喜びの祝杯
不敗の祖国のために祝杯を挙げよう

同志よ祝杯を挙げよう 誓いの祝杯を挙げよう
われわれは永遠に党に従い 戦って勝つ
祝杯 勝利の祝杯 祝杯 喜びの祝杯
嚮導の党のために祝杯を挙げよう

この「祝杯を挙げよう」は、「パルコルム」の作曲者でもある李鍾吾氏によって一九八〇年代に作られた歌と同タイトルであり、朝鮮戦争における「勝利」が主題になっているといわれる。⁽⁵⁶⁾「パルコルム」と異なり、後継者の存在を示唆する歌詞にはなっていないが、この段階では何の記念日でもないはずの一月八日に「祝杯を挙げよう」の歌詞が『労働新聞』に掲載されたり、テレビ、ラジオで放送されたりしたことが重要である。

さらに二〇一〇年一月八日付の『労働新聞』には、注目すべき二つの記事が掲載されていた。一面トップに

「偉大な指導者金正日同志に日本の著名な植物学者加茂元照が珍しく貴重な植物を贈り物に送ってきた」と題する記事が掲載されたのである。

偉大な指導者金正日同志に日本の著名な植物学者加茂元照が珍しく貴重な植物を贈り物に送ってきた

偉大な指導者金正日同志に主体九九（二〇一〇）年新年と二月の名節に際して、日本の著名な植物学者で名が知られた園芸業者の加茂元照が珍しく貴重な植物（複数）を贈り物に送ってきた。

世界的な名花として全世界に花開く不滅の花・金正日花とともにわが人民と進歩的人類に広く知られた彼が、敬愛する將軍様に差上げた贈り物の植物（複数）は冬ベゴニアと葉子花品種である。（中略）

革命的大慶事が重なった意義深い今年の年初に、中央植物園国際親善植物館に根をおろした冬ベゴニアと葉子花は、世界五大陸の数多くの国々から送られてきた各種の贈り物の植物とともにばつと咲いて敬愛する將軍様の偉大性を長く伝えるであらう。

贈呈者の加茂元照氏は、静岡県掛川市の加茂花菖蒲園を運営しており、新種のベゴニア「金正日花」を贈呈したことにより、北朝鮮では知らぬ者がいないほど有名な人物である。「金正日花」は、一九八八年二月一六日、金正日書記（当時）の四六歳の誕生日に寄贈されており、それ以来指導者を象徴する花としてポスター等に頻繁に描かれ、新五〇チョン硬貨の図案にも用いられている。⁽⁵⁷⁾そのため、新たに紹介されたこの「珍しく貴重な植物」が将来の「金正恩花」になるのではないかと考えられたのである。

さらに、同日の『労働新聞』二面には、「嚮導の党のために！」と題する政論が掲載された。この中には「パルコルム」という単語が二回出てくるほか、「祝杯」という言葉も一〇回出てくる。「喜びの祝杯、誓いの祝杯を

挙げよう」、「嚮導の党のため祝杯を挙げよう」などと前述の「祝杯を挙げよう」の歌詞をそのまま引用している部分もある。金正日総書記が後継者として歩んできた道を未来につなげるという内容になっており、後継者の存在を強く示唆している。何よりも同政論は金正日総書記のお気に入りといわれる労働新聞の董泰官論説委員が執筆したものであり、特別な記念日には指定されていない一月八日にしつこいほど「祝杯」を挙げる意味が他にないだせないのである。⁽⁵⁸⁾二〇〇九年と二〇一〇年の一月八日に見られたこれらの動きは、個別の事象としては疑いをもって見るべきものかもしれないが、全体としては金正恩後継説を強く後押しするものだったといえる。

3 『民族21』の特集記事

韓国の月刊誌『民族21』が後継者問題で特集を組んだことは驚きをもって受け止められた。『民族21』は、「南北海外がともにする統一専門誌」を標榜する韓国の代表的な親北朝鮮誌である。発行部数こそ多くはないが、その影響力は過小評価されるべきものではないといわれる。二〇〇九年五月末に発行された六月号は、八ページにわたって「北の後継者——金正恩⁽⁵⁹⁾」と題する特集を組み、「昨年末後継者が決定」し、「後継者指導体系」樹立に着手⁽⁶⁰⁾したと評した。本来後継者問題はタブーとして扱われないはずの媒体が真正面から断定的に三男後継説を報じたのであった。この事実がいち早く注目したのは、『毎日新聞』であった。⁽⁶⁰⁾さらに、『毎日新聞』が報じたという事実を早速『民族21』七月号が大きく報道したことも興味深い。それにとどまらず、同誌は二〇〇九年二月号の年末特集でも『毎日新聞』の引用を再び報じている。

韓国から様々な形で第二次後継者問題の進展が漏れ伝わってくるという現象は、一九七〇年代に朝鮮総聯を通じて金日成主席の後継者に関する情報がリークされてきた状況と非常に似通っているともいえた。

4 宣伝画と「内部文書」

一九七〇年代、金正日氏の漢字表記が不明のため同音の「金正一」と誤記されたように、金正恩氏も長らく漢字表記が不明であった。それどころか金正「Un」(은)なのか金正「Eu」(은)なのか朝鮮文字による表記でさえ不明の状態が続いていた。北朝鮮側が公式に発表しない限り確認は困難を極めた。わが国では藤本氏が二〇〇三年に扶桑社から出した著作で「金正雲」(Un 은)と表記していたため、二〇〇九年上半期までは各紙がそのように表記してきたが、徐々に「Eu」(은)だと考えられるようになり、九月頃から「金正銀」で落ち着いた。一〇月七日からは韓国政府も金ジョン「Eu」(은)に表記を変更した。台湾の写真家が撮影した先述の宣伝画に、「Un」(은)ではなく「Eu」(은)と表記されていたことも論拠として影響力を持った。「金正恩」という漢字表記が確認されたのは、二〇一〇年九月の公式化に伴ってであった。

Hamming Huang 氏撮影の宣伝画【訳文】

- 、將軍福、大將福を享受する
- わが民族の栄光
- は万景台血統、白頭の血統を継いだ青年大將金正恩同志を
- 成民族の前途は永遠に光輝く！

この宣伝画が偽物でないとすれば、「首領福」、「將軍福」とともに金正恩氏を暗示する「大將福」なる言い回しが登場していることになり、先に紹介した二〇〇九年一月一二日の政論における次のような言及と整合性がある。

る。

先軍の旗印によってわれわれの式社会主義の一大高揚期を迎えた朝鮮の百戦百勝の気概を象徴する大高潮のラップ音は首領福、將軍福が花咲くわが国で継続革命のバトンがいかに続いているかを限りなく喜びの中に広げてみせる。

さらに、毎日新聞が入手したという「内部文書」も同様に「E u n」(으)表記であったとされる。この文書は次のような内容構成であった。

「尊敬する金正恩大将同志の偉大性教養資料」

- 1 尊敬する金正恩大将同志の偉大性について
- 2 代を継いで継承される革命偉業遂行において領導の継承問題がなぜ革命の第一の重大事となるのか？
- 3 偉大な領導者金正日同志の領導に従って先軍革命偉業の代を純潔に引き継いでいく真の活動家になるにはどうすれば良いか？
- 4 尊敬する金正恩大将同志を真心から奉じ、この方の領導地盤を盤石に固めるにはどうすべきか？
- 5 尊敬する金正恩大将同志に学び、限りなき忠実性と高い実力で、党の先軍革命事業を奉じていく真の老練活動家になる準備を徹底させるにはどうすべきか？

歌解説「パルコルム」

命題解説

筆者は同文書の原本を確認しておらず、毎日新聞のホームページが公表した和訳に目を通しただけである。たとえ原本を確認していたとしても「内部文書」の真贋は容易に判定できるものではないため、これに大きく依拠するのも妥当ではないが、基本的に「尊敬する金正恩大将同志」との呼称が用いられているほか、「英明でいらっしゃる金大将同志」、「親愛なる金大将同志」、「青年大将」、「お若い将軍」という表現も用いられている。また、「二〇〇六年二月二四日、尊敬する金正恩大将同志は、金日成軍事総合大学の卒業証書と記章を授与された席については、「かつてのソ連で、スターリンの後継者をうまく立てられず、フルシチョフのようなやつが党と国家の指導権を奪取し、先代首領に対する誹謗中傷と蛮行をしたことは世間のみな知っている事実」と背景説明をしている。

5 金正男氏とみられる男性の発言

金正日国防委員長の長男・金正男氏とみられる男性の発言内容も正恩後継説を後押しするものであった。二〇〇九年六月初旬、NNNとANNが相次いでマカオでのインタビューに成功した。いずれも英語でのやりとりであったが、「三男が金正日氏の後継者になると報じられているが本当か」という質問に対し、「I think it's true.」と答えている。しかし、「直接北朝鮮から聞いたのか」については「Sorry, cannot answer.」と答えている。ただ、後継者問題については「It is totally my father's decision. I think we have to support this decision.」としており、問題の核心をついてるように思われた。

おわりに

金正恩の公式化以前において、第二次後継者問題が進展しているという状況証拠は揃っていたといえる。公式報道では第一次後継者問題を解決していった一九七〇年代と対比させるものが目立った。しかし北朝鮮自身が公式に発表しない限りはあくまでも「解釈」に過ぎなかったことも事実である。問題進展のさじ加減はひとえに金正日総書記次第であると考ええるならば、この問題が想定外の方向に進展することは常にありえたということである。後継者は誰かという問いに対する観測の多数説が金正男氏から金正哲氏へ、さらに金正恩氏へシフトしてきたことは北朝鮮指導部の説明がいかに困難であるかを示し、われわれの教訓となる。また、『労働新聞』の論調は、二〇〇九年六月頃をピークに、後継者の存在を暗示する記事が目立ったが、夏以降は急減し、金正日総書記の健在ぶりとその指導力を誇示する論調ばかりが目立ったことも事実である。

第二次後継者問題について、日韓を中心に「金正恩」氏という具体名を挙げながら多様な報道がなされてきたのに対して、北朝鮮は否定することもなく口を閉ざしつづけたが、九月に金永南最高人民会議常任委員長が共同通信のインタビューに対して、「革命伝統を継承する問題は重要だが、これに継承者（後継者）問題は関係していない」と述べ、「現時点では論議されていない」として内定報道を否定した。⁽⁶¹⁾これが公式化以前における唯一の北朝鮮による公式見解であったといえる。

一方、平壤出版社から『首領後継者論』という書物が刊行されたとして、ネット上でも閲覧が可能となった。⁽⁶²⁾内容から一九八〇年代に書かれたものと考えられる。そこでは、北朝鮮において「首領」の後継者は、人物本位という前提のもと、次世代の人物で、革命の血統を受け継ぐ者から、指導者の在任中に選出されなければならない、とされる。金裕民『後継者論』（新文化社、一九八四年）、在日本朝鮮人総聯合会中央常任委員会『後継者問

題と朝鮮』(九月書房、一九九一年)にも同様の記述が見られる。二〇〇九年の時点でこのような書物が公開されたことから、遠からず後継者問題が進展するものと展望された。

本研究の一部は、平成二二年度文部科学省科学研究費補助金若手研究 B (課題番号 41053334) により実施した。

- (1) 崔善英・チャンヨンフン「消息筋『北金正日、三男正恩後継者指名』」聯合ニュース二〇〇九年一月一日配信(韓国語)。崔善英記者は北朝鮮出身の元脱北者。一月八日は金正恩氏の誕生日とされる。
- (2) 二〇〇八年八月一日付『労働新聞』で朝鮮人民軍第一三一九軍部隊を視察したと報じられてから動静報道が途絶え、九月九日の建国六〇周年行事にも欠席したことから健康異常説が一気に現実味を帯びた。
- (3) 二〇〇九年四月の「人工地球衛星光明星二号」打ち上げと五月の核実験後にも通常どおり旺盛な活動を行っていた。但し、実際にはいかなる行程で地方を視察しているのか不明であり、同年四月二五日と六月一四日に報じられた軍視察については、写真の使い回し疑惑が指摘された。
- (4) 北朝鮮が「口コミ社会」である点については、拙稿「北朝鮮住民の意識動態——忠誠心の行方」小此木政夫編『韓国における市民意識の動態』慶應義塾大学出版会、二〇〇五年、一一九—一四六頁、拙稿「北朝鮮」小倉紀蔵・小針進編著『韓流ハンドブック』新書館、二〇〇七年、一四六—一五〇頁、拙稿「統制社会の北朝鮮——監視と動員」小此木政夫・磯崎敦仁編『北朝鮮と人間の安全保障』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年、二五—四七頁。
- (5) 本稿第Ⅱ節及び第Ⅲ節は、拙稿「北朝鮮メディアが暗示する後継者の存在——2009年の「キムジョンウン」」『紀要国際情勢』第八〇号、九三—一〇七頁をアップデイトし、大幅に加筆修正したものである。
- (6) 李教恵『北韓の後継者論』ソウル・統一研究院、二〇〇三年(韓国語)。
- (7) 前掲、拙稿「北朝鮮メディアが暗示する後継者の存在」。
- (8) 党代表者会開催に際する北朝鮮メディアの論調については、拙稿「金正恩の公式化」『外交』第三号(二〇一〇年一月)、九八—一〇五頁及び拙稿「『労働新聞』に見る党代表者会の開催と金正恩の公式化」『紀要国際情勢』第

八一号。

(9) 金正男氏は金正日総書記と成蕙琳夫人の間の長子であるが、金正哲氏と金正恩氏の母親は高英姫夫人であり、長男と二男・三男は異母兄弟である。そのため、高英姫夫人を基準にするならば、金正哲氏が長男であり、金正恩氏が二男となる。二人には、金ヨジョン（イエジョン）氏（一九八七年九月二六日生）という妹の存在が確認されている。金正哲氏、金正恩氏、金ヨジョン氏の誕生日は、藤本健二『北の後継者キム・ジョンウン』中公新書ラクレ、二〇一〇年、五二頁による。

(10) 『朝日新聞』二〇〇八年九月一七日付。

(11) 成蕙琅（萩原遼訳）『北朝鮮はるかなり——金正日官邸で暮らした20年』下巻、文藝春秋、二〇〇一年。

(12) 李韓永（浅田修訳）『金正日が愛した女たち——金正男の従兄が明かすロイヤルファミリートの豪華な日々』徳間書店、二〇〇一年。著者は、一九六一年平壤生まれ、一九八二年韓国亡命、一九九六年同書をソウルで出版、一九九七年二月に暗殺。同書は、一九九六年に東亜日報社から刊行された『大同江ロイヤルファミリート・ソウル潜行14年』（韓国語）の邦訳。

(13) 『東京新聞』二〇〇九年四月二〇日付。

(14) 『毎日新聞』二〇〇九年六月一二日付（夕刊）。

(15) 前掲、李韓永『金正日が愛した女たち』、四〇四頁。

(16) 藤本健二『核と女を愛した將軍様——金正日の料理人「最後の極秘メモ」』小学館、二〇〇六年、一二一頁。

(17) 鈴木琢磨『金正日と高英姫——平壤と大阪を結ぶ「隠された血脈」』イースト・プレス、二〇〇五年、二八九—二九一頁。

(18) 「帰国者の息子が浮上——北朝鮮・金正日総書記の後継者問題」『AERA』二〇〇二年四月二二日号、七四頁。

(19) 「北朝鮮・金正日の後継者決まる——中隊長と呼ばれる男、10月お披露目説も」『AERA』二〇〇五年九月二六日、七二頁。

(20) 『中央日報』二〇〇五年一月二四日付（韓国語）。

(21) 『朝鮮日報』二〇〇六年一月一七日付（韓国語）。

- (22) 金賢植(菅野朋子訳)『わが教え子、金正日に告ぐ——脱北エリート教授が暴く北朝鮮』新潮社、二〇〇八年、一四四—一四七頁。
- (23) 重村智計『金正日の正体』講談社現代新書、二〇〇八年、二一六頁。
- (24) 前掲、李韓永『金正日が愛した女たち』、一〇七—一〇九頁。
- (25) 『聯合ニュース』二〇〇九年八月六日配信(韓国語)。
- (26) 重村智計『金正日の後継者』ベスト新書、二〇〇九年、九五頁。
- (27) 同書、九六頁。
- (28) 重村智計『金正日』後の北朝鮮』三笠書房、二〇〇九年、一〇三—一五二頁。同書の筆者は、その著書『北朝鮮はなぜ潰れないのか』ベスト新書、二〇〇七年でも後継者問題に関する持論を展開している。
- 金平一氏は、金日成主席と金聖愛(キム・ソンエ)氏との間の長子であり、金正日総書記の異母弟にあたる人物である。一九八二年に駐ユーゴスラビア駐在武官となったことを皮切りに海外で生活を続け、駐ハンガリー大使、駐ブルガリア大使、駐フィンランド大使を経て一九九八年から駐ポーランド大使を務めている。北朝鮮では原則的に漢字を使用しないため、わが国では「金平日」とも表記される。
- (29) 宋美蘭『政論——降仙の炎』『労働新聞』二〇〇八年一月六日付(朝鮮語)。
- (30) 但し、二〇〇九年二月一〇日のNHK報道によれば、金正恩氏の年齢は金日成主席の一九二二年、金正日総書記の一九四二年に合わせるため一九八二年に変更されたという。
- (31) 宋美蘭・李東賛『政論——進撃のラップ音が千万の心臓を泣かせる』『労働新聞』二〇〇九年一月一二日付(朝鮮語)。
- (32) 宋美蘭『政論——信念は幸福を抱いてくる——社会主義の希望あふれる現実が繰り広げられている満浦市を見てまわり』『労働新聞』二〇〇九年三月一四日付(朝鮮語)。
- (33) 韓光日・鄭春姫『偉大な精神力をもった人民はいつでも勝利する』『労働新聞』二〇〇九年六月二二日付(朝鮮語)。同記事は「政論」ではないが、一般的な「政論」同様に第二面全面に掲げられた解説記事の形態をとっている。
- (34) 「社説——『今日のための今日を生きるのではなく明日のための今日に生きよう』、このスローガンをより高く掲

- げていこう」『労働新聞』二〇〇九年二月六日付（朝鮮語）。
- (35) 金日成主席の生家である「万景台故郷家」で、現地の講師が金正恩氏の名を口にしたという興味深い証言もあった。金日宇・金淑子「私のピョンヤン訪問記——快適な共和国旅行の仕方」東京…一粒出版、二〇〇九年、二二—二三〇頁。
- (36) 「偉大な領導者金正日同志が咸州郡東峰協同農場を現地指導された」『労働新聞』二〇〇九年六月七日付（朝鮮語）。
- (37) 宋美蘭「政論——白頭山密営故郷家賛歌」『労働新聞』二〇〇九年二月二日付（朝鮮語）。
- (38) 拙稿「金正日とイデオロギー——北朝鮮「先軍思想」への道」『慶應の教養学』慶應義塾大学出版会、二〇〇八年、五九—九二頁及び拙稿「金正日「先軍政治」の本質」小此木政夫編著『危機の朝鮮半島』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年、二八三—三〇四頁。
- (39) 「社説——革命的大高潮の炎高く一五〇日戦闘を繰り広げ今年を強盛大国建設歴史に特記する年になるようにしよう」『労働新聞』二〇〇九年五月四日付（朝鮮語）。
- (40) 「社説——集中的な宣伝扇動攻勢ですべての一五〇日戦闘場が力強く沸き立つようにしよう」『労働新聞』二〇〇九年六月一日付（朝鮮語）。
- (41) 詳細については、「北朝鮮が「一五〇日戦闘」を展開——「ポスト金正日」へ布石か」『RP北朝鮮政策動向』No. 四三一（二〇〇九年第九号）、七—一二頁。筆者も同記事の見解に賛同するものである。
- (42) 例えば、前掲、金賢植「わが教え子、金正日に告ぐ」第五章（二四〇—一七五頁）が参考になる。
- (43) 「朝鮮芸術映画『白玉』（第一、二部）試写会」『労働新聞』二〇〇九年四月二二日付（朝鮮語）。
- (44) 「朝鮮で文化施設リニューアル」『朝鮮新報』二〇〇九年一月一八日付。
- (45) タカハシミノルは、読売新聞の高木健夫記者がモデルになっているとされる。高木記者は、日朝文化交流協会の初代理事長を務め、『金日成祖国への道——抗日遊撃戦の記録』彩流社、一九八二年をはじめとする複数の著作で北朝鮮を称賛したことで知られる。
- (46) 「新映画紹介『私が見た国』」『朝鮮』平壤…二〇〇九年一月号（朝鮮語）。

- (47) 例えば、「偉大な領導者金正日同志が新年を迎えて党と国家、軍隊の幹部達とともに銀河水管弦楽団の新年慶祝音楽会を觀覽された」『労働新聞』二〇一〇年一月一日付（朝鮮語）。
- (48) 銀河水は、二〇一〇年の国慶節の際にも金正日国防委員長の前で単独公演を行った（「偉大な領導者金正日同志が共和国創建六二周年に際して行われた銀河水『九月音楽会』を觀覽された」『労働新聞』二〇一〇年九月一日付（朝鮮語））。
- (49) 「偉大な領導者金正日總書記が銀河水管弦楽団の旧正月音楽会を觀覽された」『労働新聞』二〇一〇年二月一六日付（朝鮮語）。
- (50) 「二〇〇九年 朝鮮の芸術、スポーツを振り返る——強盛大国建設を力強く後押し」『朝鮮新報』二〇〇九年二月一六日付。
- (51) 二〇〇九年六月一七日、NNN「ストリートニュース」が初めてそのメロディを放映した。なお、それに先んじて、日本のNGO「RENK（救え！北朝鮮の民衆／緊急行動ネットワーク）」が、金正恩氏を讃える歌が平壤の小学校で教えられていると報告していた。
- (52) 二〇〇九年七月二〇日、NHK総合テレビが「ニュース7」の中で「北朝鮮「キム大将」称賛の歌」として放映した。
- (53) 『RP北朝鮮政策動向』No.四四〇（二〇一〇年第四号）、一四—一五頁。
- (54) 「バルコルム」は、公演最終曲の二番と三番の間奏として、メロディの一部が一〇秒ほど流され、合唱や曲名、歌詞の紹介はなかったという。前掲、『RP北朝鮮政策動向』No.四四〇（二〇一〇年第四号）、一五頁。
- (55) 作詞・崔準京、作曲・李鍾吾、編曲・金海星、歌・「銀河水」白美英、咸金珠、徐銀香、張英玉、「功勳国家合唱団」洪京勲、李相洙、朴金星、演奏・「銀河水」（人名は音訳）。
- (56) 別バージョンは、作詞・崔労働、作曲・李鍾吾、歌・李京淑。「われわれの歳月が良い、労働党が良い、祝杯祝杯祝杯を挙げよう」などと歌われ、認知度は非常に高い。
- (57) 「金日成花」は、ラン科の花で、インドネシアのスカルノ大統領から新種譲渡の申し出があったとされており、新いウォン硬貨の圖案にも用いられている。

- (58) 一月八日の『労働新聞』に政論が掲載されたのは二〇〇九年、二〇一〇年と二年連続であった。なお、二〇〇九年、『労働新聞』の政論は例年の倍程度掲載された(二〇〇五年二二本、二〇〇六年二八本、二〇〇七年三〇本、二〇〇八年二九本、二〇〇九年五八本)。二〇〇九年に政論を執筆した人数は八名であり、連名記事からその序列を割り出すと、推定序列は次のとおりであり、董泰官記者(論説委員)が筆頭の模様である(括弧内は掲載数、連名含む)。董泰官(四)、宋美蘭(一九)、趙革哲(六)、李運賛(二)、高賢柱(五)、李東賛(二〇)、方城華(九)、金順栄(七)。
- (59) 「特集——北の後継者 金正恩」『民族21』ソウル…二〇〇九年六月号、一六—二三頁(韓国語)。
- (60) 『毎日新聞』二〇〇九年五月二九日付(夕刊)。
- (61) 「日朝、実りある関係づくりを——民主党政権に金永南委員長」共同通信二〇〇九年九月一〇日配信。
- (62) 詳細は、柳東烈「『領導後継者論』から見た北朝鮮の後継者」『月刊朝鮮』ソウル…二〇〇九年七月号(韓国語)。